



F・J・ガルの学説に見る骨相学の間観：骨相学の教育史研究のための基礎的研究

平野，亮

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4(1):37-46

(Issue Date)

2010-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81002635>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002635>



F・J・ガルの学説に見る骨相学の人間観 —骨相学の教育史研究のための基礎的研究—

F. J. Gall's Doctrine and Phrenological Perspective of Human Nature: Introduction to Study of Phrenology in History of Education

平 野 亮 *

Ryo HIRANO*

要約 : This essay examines what F. J. Gall's doctrine is and how phrenology views human nature. Main two documents in this essay, one is the first published article of Gall, founder of phrenology (1798) and the other is a published lecture note of 1805's lecture at Dresden (translated in English in 1807), shows that the idea of "nature" is crucially important to Gall or his theory formulation. That is to say, according to Gall, shape of skull which represents person's 27 innate dispositions, or faculties is plan of nature. And this view of human on which phrenology is based is almost traditional and is similar to that of East. On the other hand, Gall explained it in terms of physiology of brain, which was a novel idea at that time, of course different from East. In 19th century, Western phrenologists eagerly insisted that phrenology was very helpful to education, while it was identified and criticized as materialism and fatalism because of its view of human nature. Phrenology undoubtedly played a big role in history of education but there are few studies on this subject, especially in Japan. This essay would be an introduction to study of phrenology in history of education.

1. はじめに

《21世紀は「脳の世紀」である》¹。これは、20世紀最後の10年間を「脳の10年 (Decade of the Brain)」と宣言し、脳研究を国家的に重点化したアメリカや欧州諸国に呼応・追従する形で、90年代中頃に伊藤正男ら日本の脳科学者が打ち出した標語である。そして2010年の今日、脳科学の研究は、事実上活況を呈している。メディアや商戦における賑々しき昨今の「脳ブーム」も、この研究の潮流や成果に基づいて——或いは併走、しばしば先行して——あるのである。周知の通り、教育分野においてとて例外ではない。

遡ること10年以上、1997年の『脳の世紀ニュース』8月号に、これからの脳研究に関する「戦略目標タイムテーブル」が掲載された²。これは、科学技術会議ライフサイエンス部会内に設置された医学者中心の脳科学委員会が作成した、「脳の世紀」における研究計画の一覧表で、脳研究の「長期的な考え方」に基づく戦略目標を、5年ずつ20年後まで4段階に整理して示したものである。医学・生物学から哲学的領域まで射程に収めた脳科学が、それら広範な研究分野の進展に寄与することを確信している様子がこの表から窺われるのだが、中でもひととき興味深いのは、「5年後」の脳研究成

果の「貢献例」に記された「育児・教育への助言」という文言である。

「5年後」、即ち研究開始から最も早い段階での成果が還元される分野として、「育児・教育」が挙げられる。この事実をどのように引き取るのがよいだろう。この段階の具体的な戦略目標の一つが「記憶、学習の解明」であったために、そこから論理的に導き出された分野だったに過ぎない、とすることができるとも知れないし、或いはその逆かも知れない。いずれここでは、「脳の世紀」の脳研究において、最初の研究成果が寄与すべきは養育・教育分野と想定されていた、という事実を強調し、押さえておこう。

さて、このような事態は、果たして歴史的に特異なことなのだろうか。実はそうではない。150年余り前の西洋世界では、同じように脳の学説とそれを応用した教育論が活発な議論を呼び、市井の一つのホットな話題となっていた。フランツ・ヨーゼフ・ガル (Franz Joseph Gall, 1758 - 1828) の「骨相学 (phrenology)」である。

一見手相占いなど占術の類に見紛う字面だが、骨相学とは19世紀西洋に流行した、専門家たちからは「脳の生理学」と自称された科学である。そして興味深いことには、教育 (education)こそ、しばしばこの骨相学の側から、「最も必要とされ、もっとも輝かし

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2010年3月31日 受付)
(2010年7月15日 受理)

い成果 (happiest result) を産出する分野」と名指された所だったのである³。

本稿では、骨相学の教育史研究を進めてゆく上で土台となる基礎的事項をガル学説および骨相学の内容を中心に押さえつつ、その人間観の検討を試みる。「近年、最先端の数値解析を併用した脳画像研究から、…一部が見直されつつある」⁴とも言われる骨相学は、どのような教育を善とし、どのような教育を悪としたのか。それはどのような思想的、ないし社会的等背景の前であったのか。一般の人々からは、当時どのように受容されたのか。

一方では学校教育などにおける「科学的教育 (scientific education)」「非宗教的教育 (secular education)」⁵、また 20 世紀初頭 (アメリカ) の「進歩主義教育 (progressive education)」の先駆として骨相学を評価する研究が提出されているが、尚も教育史 (とりわけ日本における教育史研究) における骨相学の立つ瀬は、小さきに失っている感がある。19 世紀から 20 世紀にかけて、主要な教育事典⁷では極めて高い割合で項目が立てられた「骨相学」を教育史研究のテーマとすることは、非常に興味深く且つ必要なことである。脳科学への、教育の側からの期待も高まる今日、それは自ずから意義深い。

2. 先行研究について

そもそも骨相学 (phrenology, フレノロジー) とは、18 世紀末にドイツ出身の医師 F・J・ガル (パリに移り住んだ後は “François” と表記、1819 年にフランス国籍を取得している) が提唱した学説に由来する、19 世紀西洋に大流行した、当時新興の「科学」である。その内容を「技術」的な側面から簡約すれば、“人間の頭部の隆起や陥没を見る・測ることによって、その人の持つ能力的・気質的特性が判別できる” とする理論であり、実際にはより一層大衆化され、“頭の形 (= こぶ) でその人間が分かる” 根拠として広く理解され、利用された。だが、事実、骨相学の企みはもっと面白い。

ガルは、18 世紀末から 19 世紀のはじめにかけてパリを中心に活躍した医者・解剖学者で、脳・神経科学、心理学、犯罪学、人相学、似非科学など様々な文脈において言及・議論される科学史上の重要人物である。ガルの人物から学説まで総合的に分析・考察したレスキー (E. Lesky)⁸、学説形成の思想的関係を分析したテムキン (O. Temkin)⁹、精神医学史の関心から研究を展開したアッカーネヒト (E. H. Ackerknecht) 及びパリ人類博物館 (Musée de l'homme) のヴァロワ (H. V. Vallois)¹⁰ など、これまで数々の歴史家がガル研究を提出してきた¹¹。

最近でも、「ガルと骨相学のドイツ起源に関する英語圏の研究誌における空白」を埋める 2002 年のジョン・ヴァン・ワイ (John Van Wyhe) の論文¹²は、それらの先行研究にも詳しく、加えてそれまでのガル研究で記述や検証が曖昧・不十分だった箇所を丹念に検討している (例えば、ガルの著作がカトリック教会の禁書目録に載ったという情報に関して、当該年代の目録を参照しこれを否定している¹³)。ガルの広範囲に及ぶ講演旅行の分析などもなされており、それ自体とても面白い研究である。

日本にも、多くはないが、ガルを取り上げた論考が存在する。古くは森嶋外がガルの学説を紹介した論文をものしているし¹⁴、また歴史家の樺山紘一¹⁵は身体論の歴史から、加藤恒男¹⁶はヘーゲル

研究からガルに辿り着き、検討を加えている。「神経心理学史の里程標」という連載で、(どれも 2, 3 頁だが) 4 回に亘ってガルを紹介した浜名淑彦の記事は、上に挙げたような西洋での先行研究を土台にした比較的詳細な解説とともに、20 年近く前のものではあるものの、生家や墓などの旧跡、更には人類博物館に保存された彼自身の頭蓋骨など、ガルにまつわる種々の写真が添えられていて楽しい¹⁷。また近年も、脳科学に関連した言及は勿論、心理学や精神医学との関連でガルを論じた論稿¹⁸が見られる。

以下では、これらを始めとする先行研究の成果を参照しつつ、ガルの講演録や論文等の史料から、彼の、引いては骨相学の人間観を分析してゆく。即ち、骨相学の教育論・教育観を、骨相学文献・言説から析出される人間観から描き出す作業の端緒とすることが、本稿の目論見である。

3. ガルの学説

1758 年、シュトゥットガルトに程近いドイツ南西の村ティーフェンブロン (Tiefenbronn) でガルは生まれた¹⁹。幼少の頃は、牧師だったおじから聖職者教育を受けたが、成長の後にストラスブール大学に進学、念願だった医学を専攻し、更にウィーン大学で研究を続けて、1785 年に学位を取得した。

大学を修了後、ストラスブール大学の先輩で同郷人だった J・P・フランク (Johann Peter Frank, 1745 - 1821)²⁰ の計らいにより、84 年にウィーンに新設されたばかりだった精神病院「愚者の塔 (Narrenturm)」²¹ への自由な出入りを認められたガルは、かねてからの関心であった“外面的特徴と能力の関係”を検証するべく、あらゆる精神病者を観察した。

そして 1796 年、ウィーンの自宅を会場に公開講座を開き、後に骨相学と呼ばれるようになる学説を初めて公にした。以来、1828 年にパリで亡くなるその時まで、ガルは自身の理論の積極的な普及に努めることになる。

1801 年には、彼の学説が唯物論 (Materialismus) であり宿命論 (Fatalismus) に与するものとして、神聖ローマ帝国最後の皇帝フランツ 2 世 (Franz II, 在 1792 - 1806) により、ウィーンにおける全ての講演・出版活動を禁止されてしまう。それでもガルは諦めず、1805 年から助手のシュブルツハイム (Johann Gaspar Spurzheim, 1775 - 1832, 始め “Chrsitophe” と名乗っていたが後に改め、他に “Kaspar” “Caspar” とともに、ドイツ地域を中心に 50 を超えるヨーロッパの各町を廻る精力的な講演活動を続けた²²。『年代記』の中で、ゲーテ (J. W. Goethe, 1749 - 1832) が、ガルの講義に「詰めかけて行く沢山の聴講者の中に…まざった」と述べたのも、この頃のことである²³。

この時ゲーテは頭部の触診を受け、「大衆相手の演説家に生まれついている」との診断を受けた。頭に診られた《こぶ》が素質の表徴である、と断じうる根拠が骨相学の原型となったガルの学説であったことは言うまでもない。ガルの理論とはどのようなものであったのか。

オーストリア皇帝による「禁令」が宣伝となって逆に一層の注目を集めたガルの学説に関して、それも手伝ってか、ドイツ語で行われた講演録のフランス語訳および英語訳版が、早くも 1807 年には出版されていた。1805 年 6 月 14 日から 3 週間に亘ってドイツ東

部のドレスデンで行われた講義に関しても、町の財務長官ブレーデ (Karl August Blöde, 1773 – 1820) が記録し、出版している。この英訳版からガル理論の要点を抜き出してみよう²⁴。

- ①ヒトや動物は、ある特定の気質 (dispositions) や性向 (inclinations) を持って生まれる
- ②ヒトや動物は、それを発現・発揮するための特定の生得的な器官 (organ) を有する
- ③これらの器官は、脳に存在する (脳は能力そのものではなく、物質的な必要条件)
- ④脳は全ての精神機能の総合器官ではなく、各々の生得的性質を持つ一つ一つの器官の全てが集合する場所である
- ⑤器官の大きさは、気質の力に比例して増大する
- ⑥これらの生得的気質の器官は、脳の表面に隆起となって表れる
- ⑦器官は、頭蓋の外側の骨性の覆い〔頭蓋骨〕の上にも一定の隆起 (protuberance) をつくる

ここで言う「生得的気質 (innate dispositions)」とは、視覚や聴覚といった「外的感覚」の能力に加えて、動物に共通の「生殖の衝動 (The impulse to propagation)」や「友情 (friendly attachment)」[「殺人・肉食 (murdering)」]、また人間に特徴的な「機知 (wit)」[「推論 (inference)」]「宗教心 (Theosophy)」といった27個の傾向 (inclinations) や能力 (faculties) である。

尚、気質の項目数は確定されたものではない。というのも、シュプルトツハイムも証言しているように、気質や器官は生得的なのだが、まだ見出されていない器官 (脳の構成部分) が研究の発展によって新たに〈発見〉されるかも知れないためであり、提出されるものはいつも暫定的なりストでしかないからだ²⁵。ヴァン・ワイによれば、初期は26や27であったガルの器官も、最終的には35個 (2個は未確定) にまで増加してゆくことになる²⁶ (図1²⁷)。

この30個前後の気質・能力をそれぞれ司る30個前後の「器官」が集まって形成されるのが「脳」である。器官の種類や数は人間と動物で共通しているが、その発達の程度や組み合わせによって決まる脳の「機能 (functions)」は種によって異なり、特に道徳的・精神的 (moral)、及び知的 (intellectual) な能力の発現は「人間」に顕著である。それでも、何れの能力・気質に発達的な特徴が見られるかは、更に個々人によっても異なっていると言う²⁸。

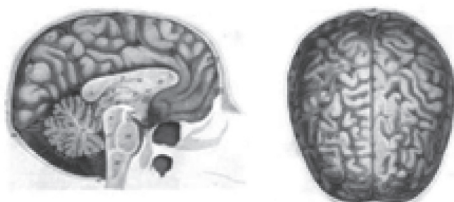


図1 各器官を見るための脳の解剖図 (1815)

この発達の特徴は器官の大きさに反映され、即ち「器官は、気質の力に比例して」発達する。大きくなった器官は、頭蓋に影響を与え、そこに隆起を作る。例えば、友情の器官が発達した人間であれば、後頭部側面 (器官は右脳・左脳に対称的に位置する) の特定部位が盛り上がった頭形となり、厚い「友情」がその人の性格を表わ

す。逆に、その器官の発達が未熟 (小さい) であれば、「友情」に乏しい人間である、といった具合だ。

ガルは元々の着想を、幼少時代の学友や兄弟、動物の観察から得たが²⁹、彼はそれに脳の学問としての体系化を試みた。この講演録においても、後半の上記①～⑦の詳説と27個の器官の解説に先立つ形で、全88頁中最初の14頁が脳と神経の解剖学講義に充てられている³⁰。レスキー³¹や森鷗外は、ガルの学説を論じるにあたって「解剖学」(構造)と「生理学」(機能)の2側面³²から整理し、迫っているが、論敵をすら唸らしたという脳解剖の実演³³と、現代と殆ど同じ解剖学用語で展開されるガルの脳と神経の講義は、「沢山の聴講者」にとって説得的にして蠱惑的なものであったろう、ということを書き添えておく。

4. 「骨相学 (Phrenology)」へ

以上が、ガルが提唱した学説の要諦である。分かる通り、骨相学は占術ではなかった。語感から受ける卜占的な印象とは異なり、元来、脳や神経に基づく生理学的な人間精神の科学だったのだ。そして、「脳の生理学」に学理をもつこの器官学に実践的な側面を抽象して説明を加えるならば、「器官の発達が顕現した頭の《こぶ》が、その部に局在する才能・性格を示す」となる。これは丁度、古今東西に類例多き伝統的な術、顔や頭の表徴を読み解く人相学・観相学・physiognomy のようである (事実として、ガルは人相学の影響を受けていたし、「フレノロジー (骨相学)」という語はフィジオノミー (観相学 [フランス語の physiognomie]) という語と区別されずに用いられていた³⁴ という。これらは後述する)。

しかし、そもそもガルは「骨相学 (phrenology)」という名称を終生用いていない。ヴァン・ワイによれば、ガルは自身の「脳と心に関する科学」を「頭蓋学 (Schädellehre)」[「器官学 (Organlogie)」]、或いは「脳の生理学 (physiologie du cerveau)」と称していた³⁵。アッカークネヒトは、ガルは「頭蓋学 (Craniologie)」の語も使用していたということを事典の中で書いているが³⁶、ヴァン・ワイはこれを否定している。

フレノロジーとは、ギリシャ語の「φρήν (phrēn, 心)」と「λόγος (logos, 論理)」からなる造語で、1815年にイギリスの科学者フォースター (Thomas Ignatius Maria Forster, 1789 – 1860) による提案を、シュプルトツハイムが採用したものである³⁷。この命名は、その初出典として扱われるフォースターの論文 (1815年)³⁸では解説されていないが、古代ギリシャの時代に、横隔膜 (φρήν) が靈魂や理性の宿る精神の座 (φρήν) と考えられたことに由来する³⁹。即ち、これは骨相学を検討・考察する上で非常に重要な点なのだが、「脳」よりも、ましてや「骨」などではない、「心」の学問」という意味合いがフレノロジーの命名には企図されていたということである。

では、日本語の「骨相学」という語はどうだろう。この語は中国語彙から伝わった卜占的な「骨相」に関する「学」ではなく、「フレノロジー」の翻訳語である、という点を押さえておかなければならない。医学史家の富士川游 (1865 – 1940) も、「支那の古書にある「骨相」は解剖/生理上の研究に基づかないので「フレノロジー」とは違う」と述べているように⁴⁰、「骨相学」もまた、はじめからフレノロジー = 「精神学」なのである。

尤も、西洋文化移入という明治の「大翻訳運動」の過程で、フレ

ノロジーもまた幾らかの訳案が提出されていた。それらの訳案を眺めていると、まるで訳者の姿勢や翻訳観が透けて見えて来るようだ。確認された最も古いものでは、1866年に島村鼎甫（1830 - 1881）が『生理發蒙』の中で「相脳学」⁴¹と、1870年頃に西周（1829 - 1927）が「脳学」⁴¹と翻訳した例があり、また『医学辞彙』（1886）の「横隔膜学・心学」（但し表記は「Phrenologia」となっている）⁴²、更には「（西洋）人相学」（1890）⁴³や「性相学」（1911）⁴⁴などとも訳されていた。

このように種々の訳語が提案されたわけだが、ついには「骨相学」が採用され、現代に至っている（但し、「フレノロジー」と片仮名書きされることも少なくはなかった）。西洋の文明を効率的に吸収することを目的に、イギリスで流通していた安価で且つ広範な内容を取り扱った大衆向け啓蒙書『民衆の知識（*Chambers's Information for The People*）』（1833-1855；1857?）を、殆どそのまま翻訳する形で文部省から刊行された『百科全書』（1873-1883）⁴⁵において、訳者の長谷川泰（1842 - 1912）が「骨相学」を用いたことも、フレノロジーの翻訳としてこの語が定着する一要因だったのかも知れない。尤もこれは、「脳学」や「心学」という訳語とは異なり、「精神の学」ではない「骨の学」という、提唱者の意図から考えれば、「誤解」を与える危険性の高い翻訳とも言えるだろう。

だが実際、フレノロジーは他方では *craniology*（頭蓋学）や *cranioscopy*（頭蓋計測／観察）とも呼ばれてきた。「頭蓋骨の学問」という命名は日本語の「骨相学」に近いが、ガルは当初から、「私の研究対象は脳（*brain*／*Hirn*）である」⁴⁶。頭蓋骨（*cranium*／*Schädel*）は、脳の外的表面の正確な鋳型に過ぎない」と言い、自分の科学を曲解したような頭蓋計測（*craniology*／*Kranioskopia*）という呼称を嫌った⁴⁷（但し、ガル学説の自称については先行研究においても前述の通り諸説あり、残念ながら力及ばず未検討である）。だが、図2区画された頭蓋骨（1807）理論や科学研究としてはさておき、実際の診断や人間読解の術としてのこの学は、「骨相学」以外のなものでもなかった（図2⁴⁸）。

日本が「骨相学」を吸収した19世紀の終わり頃には、西洋におけるフレノロジーのかつての隆盛は影をひそめていた。しかしそれ以降も、教育や職業指導（*vocational guidance*）などの領域では実践や言説の生産が繰り返されており、文献の翻訳を通じて日本にも伝わっていた。とは言え、ジョン・ハート『教室の中』（1868年；邦訳『学室要論』1876年）⁴⁹にしる、時代的に遅れるがポール・ダグラス『アメリカの徒弟と産業教育』（1921年；邦訳『職業指導論』1926年）⁵⁰にしる、これらの例の伝えるところは、人間を測り読み解くための「骨相の学問」である。骨相学の人間観を分析しようとするとき、或いはフレノロジーの興亡の歴史を振り返るとき、それはむしろ「妙訳」であったと言うこともできるのである。

尚、精神の哲学（*mental philosophy*）としてのフレノロジーの名は、シュブルツハイムの骨相学が初めてではないという。パトリシア・ノエル（P. Noel）とエリック・カールソン（E. Carlson）の研究によれば、アメリカ建国の父にして精神医学史にもその名を残すベンジャミン・ラッシュ（Benjamin Rush, 1745 - 1813）に

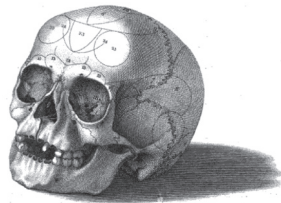


図2 区画された頭蓋骨（1807）

による手稿「心についての講義（*Lectures upon the Mind*）」に、骨相学とは異なる「フレノロジー」が数回登場しており、遅くとも1805年の講演では、心の働きと身体との関係に関する研究をこの語で表していたという⁵¹。骨相学同様、18世紀の能力心理学（*faculty psychology*）の影響を受けての語法ではあったものの、これを脳の局在説で論じたことはガルの創意であった。

5. 人間のネイチャーとしての骨相＝精神・心

ところで、もう一点だけ「骨相学」という日本語を足がかりにして、器官学ないし骨相学の人間観や世界観を論じてみたい。「骨相」という言葉は、『大言海』によると、少なくとも唐の歴史書『北史』（659）には既に見られ、日本でも平安中期の漢詩文集『本朝文粹』（1030頃）に見られる古い語だ⁵²。『本朝文粹』の「論運命」と題された文には、人間の資質や運命を判ずる徴として「骨相」が登場している⁵³。

さて、これとは別に日本語には「天骨」という言葉がある。古くは万葉集にも用例が見られるこの語は、「骨相」同様大陸からの伝来語であり、その意味は「自然に備わった風骨。生まれつきの才能」である（『下学集』（1444）に「天然之有骨格也（てんねんとシテのこっかくあるなり）」とあるように自ずからそうであるところの骨や身体⁵⁴、更には気質や性格にまでと、天骨の意味のイマジネーションは広がる）。ここでの「天」とは、「先天的」や「天性」といった言葉の「天」と同じであり、ちょうど明治初期に「天賦人權」と訳された「ナチュラル・ライト（*natural right*）」からも分かる通り、西洋語彙言うところの「ネイチャー（*nature*）」と重なる概念である⁵⁵。

西洋語のネイチャーは、ギリシャ語の「ピュシス（*ψυσις*）」、その訳語であるラテン語の「ナトゥーラ（*nātūra*）」から来ており、すなわち「自然」である。「ネイチャー」とは、西洋において非常に豊かな観念史（*history of idea*）を紡いできている概念だが⁵⁶、それは長らくフランシス・ベーコンが17世紀に端的に述べているように「神の力（*power of God*）」であり、その探求や成果は「迷信に対する最も確実な医薬（*remedy*）」であった⁵⁷。

18世紀から19世紀にかけての西洋は、村上陽一郎によれば、「神が棚上げされ、知識論は人間と自然との関係の中だけで問われる」ようになった時代にあった⁵⁸。初期近代とは異なり、「神—自然—人間」の関係から「神」は隠されてしまうが、それは「消えた」ことを意味しない。「自然」に何らかの秩序・法則を見出しうるといふ西洋人の、神を根拠とした絶対的の自信に変わりはなかった、と言い換えても良いだろう。

その上、この時期は17世紀にニュートン（Isaac Newton, 1642 - 1727）が発表した諸研究のインパクトの渦中にあり、とりわけあらゆる「自然探求」に関する方法論や姿勢は、ニュートンに多大な影響を受けていた⁵⁹。18～19世紀において、「迷信に対する最も確実な医薬」としての自然探求＝科学への信頼と渴望が決定的になった一つの所以である。

ここで興味深いのは、ニュートンに刺激を受けたネイチャー研究が盛んになったこの時期、人間（ヒューマン・ネイチャー）を対象とした探求＝科学もまた同様の盛り上がりを見せ、活発な議論が交わされたということである。例えば、一種のブームを巻き起こすも学界からは否定され、現在では骨相学とともに似非科学史

の中で語られるメスメリズム (Mesmerism) は、ニュートン説そのものに影響を受けて理論構築したドイツの医師メスメル (Franz Anton Mesmer, 1734 – 1815) が、「自然」の原理である「動物磁気」と人間の関係を論じたものであったし⁶⁰、日本語訳では分かりにくい⁶¹が、ヒューム (David Hume, 1711 – 1776) の『人性論 (A Treatise on Human Nature)』(1734-1737) などは、ニュートンに刺激されつつ、特有なものとしての“ヒューマン・ネイチャー”そのものを主題として考察した論稿であった⁶¹。

骨相学・器官学との関連で言えば、彼もまたニュートンへの讃辞を惜しまないドイツのラーファーター (Johann Kaspar Lavater, 1741 – 1801) とその人相学が重要である。これも「人相学」という翻訳からでは思いも寄らないことだが、その原義はピュシス・グノーモン (γνώμων), 訳するなら「自然の判断・指標」である。ガルと決別し骨相学を体系化したシュプルツハイムの説明を引くならば、「自然の知識 (knowledge of nature)」, 即ち「内なる素質 (internal qualities) を表す外面的な表徴 (external signs) の知」⁶²、つまり外面の表れからその人間の内面 (ピュシス) を知ろうとする学が、人相学・観相学なのである。それは、ラーファーターも18世紀のネイチャー探求者＝“自然科学者”であったということの意味している⁶³。

そして、同じ事が実はガルにも言える。ガルが彼の“新しい科学”を初めて文章にして人々のもとに届けた論文、オーストリアの詩人フォン・レッツァー (Joseph Friedrich von Retzer, 1754 – 1824) 宛書簡という形式で書かれた記事『『人間と動物の脳の働き』⁶⁴の既書ききえられた緒論に関するガル博士からフォン・レッツァー氏への書簡 (Des Herrn Dr. F. J. Gall Schreiben über seinen bereits geendigten Prodrömus über die Verrichtungen des Gehirns der Menschen und Thiere an Herrn Jos. Fr. von Retzer)』(1798) の中で、彼は自身の学説を開陳するに当たって、次のような語り出しをしている。

私は読者とともに、自然 (nature / Natur) が私を導いていった点から話を始めます。「退屈な実験」を重ねてきた私は、関係に関する諸法則の理論を打ち立てました。あなたの方の前に、急いでこの基礎的な原理を呈示いたします。⁶⁵

本文のこの後に続くのは、先に本稿で説明したガル学説①～⑦の祖型的なアイデアの解説 (但し、27個の器官の説明はまだない) である。つまりこれは、ガルの取り組みは西洋科学に顕著な〈発見〉という作業であって、彼の器官学の理論は「自然」によって導かれた人間の原理・法則 (自然) であるという彼の宣言として読める箇所なのである。

「私はフィジオグノミスト以外の何者でもない」⁶⁶、或いは「真理 (Truth) にはそれに相応しいフィジオグノミーがある」⁶⁷と表明するガルの意味しているところは、農夫は作物に合わせる土の相 (aspect) を判断する——乾湿や軽重、肥えているか痩せているか。或いは、庭師は落ち葉や枝先を見て木の健康状態を判断する、という例を挙げ、「すべてのネイチャーは、フィジオグノミー研究によって理解されるだろう」⁶⁸とした先のシュプルツハイムの言う「観相学」である。

ガルやシュプルツハイムにとって、観相学者とは自然科学者に他ならない。イギリス最大の骨相学者ジョージ・クーム (George Combe, 1788 – 1858) が「自然からの贈り物 (gifts of nature)」と呼んだ、脳に生得的な生理学的能力・性向は、頭蓋骨に相となって顕現し、我々に人間の自然を伝えるのである。尤も、ウェクスラー (J. Wechsler) が研究したようなマイムや戯画の源泉としての“同一視された観相学と骨相学”は、「肉体的記号の〈解釈〉」術としての、所謂“人相学”に他ならなかったのだが⁷⁰。

さて、ガルとその理論のこのような態度は、骨相学大流行の一つの要因であったと同時に他方では、前述の神聖ローマ皇帝による禁令の例のように、早くから反キリスト教的な宿命論・唯物論と見なされ、非難された。ガル自身には、人間の生得的な宗教性をも措定した、「精神的な (spiritual / geistigen)」対象を取り扱っているという意識があったし、神の御業としての「自然」に従って「自然」を研究しているという自負があった⁷¹。

だが彼が、「科学 (science / Wissenschaft) の保護の仕方を知る者の支援がなければ、…〔器官学を立証するための——引用者補足〕標本や検体の収集は散々な結果に終わっていただろう」⁷²と叙述する時、ガルの意識の如何に関わらず、彼の体系は哲学者のコリングウッド (R. G. Collingwood) が近代以降「物質と自然法則こそ自然科学の不変なる対象となった」⁷³と論じたところの「科学」そのものであり、それが人間精神について論じたものであった以上、当時唯物論・宿命論の排りを免れることは不可能だったのである。ここの限りでは、所謂、科学的手順や科学的合理性を糾弾されていたのではないという点にも注意を払っておこう。脳が一樣な物質だという説に対して機能局在論を唱えた点、また中世期に支配的であったガレノス (Γαληνός, 130 頃 – 200 頃) 以来の脳室の機能局在論に対して「大脳皮質の平面的局在論を提出した」⁷⁴点は、神経学者や脳学者が今日の科学からガルの功績として認めるところである。だが一方で、まさにこの点、即ち人間の精神活動を「脳内のもしくは頭蓋骨上の地図に還元」して「可視的アトラス」に貶めた点にこそ、樺山紘一の考察するところによれば、当時の唯物論批判の矛先が向けられたのだった⁷⁵。言い換えれば、器官学・骨相学の人間観に対する攻撃である。

但し実際は、クーター (R. Cooter) も指摘しているように、「脳に関する理論に比して、彼の哲学の方は、構造的であるよりもずっと反動的 (reactive) であったため、…認識論的にもまた社会的にも、ガル学説は多数の異なったやり方で機能し得た。…実際、骨相学は19世紀を通じて、非物質的な伝統 (immaterial traditions)、即ちオカルト的で錬金術的でネオ・プラトニズム的で浪漫主義的なものと結びついていた」⁷⁶のであった。「マテリアリズム」だったはずの学説が「非・マテリアル」な伝統と結びついたように、骨相学を巡っては、一見相矛盾するような批判や展開が巻き起こされてゆく。史料や先行研究を繙読する際は、この点に留意しておかなければならない。

いずれにせよ、器官学・骨相学の理論体系は、人間のネイチャーを探求し、自然の案内の下に〈発見〉された“科学的原理”であった——ガルを始め骨相学者たちはそのように主張した。人間の自然である脳 (気質と器官)、及び「脳の外的表面の正確な鑄型」である頭蓋骨 (敢えて「骨相」と呼ぶのもよい) が人間のネイチャーを

解きはぐす様は、恰も「天骨」である。勿論、天骨と骨相学（フレノロジー）に直接的な関係はない。ただ洋の東西に通じる、“伝統的な人間観”が見えるだけである。

6. 骨相学の“新しさ”と“古さ”

先行研究の多くが、彼自身の記述の随所から得心することのできる、ガルの「自然主義(naturalism)」を指摘してきた。テムキンやヴァン・ワイは、ガルの自然主義と学説の相互連関について論じ、レスキーは更に「自然学者(Naturforscher)」ガルの、「人間像および世界像」にも論及している⁷⁷。「ネイチャー」はガルの、そして骨相学の人間観にとって、欠かさざるべき重大な主題なのであった。

本稿では、それらの研究と関心・着眼点を共有しつつも、いっそう認識論的な視角から、特に「人間観」に焦点を絞って、分析を加えてみた。すると、当時であってガル学説、ないし骨相学の有していた科学的にして、同時に伝統的という特徴的な2側面が新たに浮かび上がってくるのだった。換言すれば、「天骨」という概念を契機とした以上の思索と観察から見えてくるのは、骨相学の“新しさ”と“古さ”である。

学問的系譜で見れば、骨相学は①精神の座に関する論争（「心臓か脳か」）と生理学、及び②人相学・観相学の2つの合流として評価することができる。精神の座を何らかの器官に求めるアイデアも、能力や性向を精神器官の機能とする考えも、外面が内面の表徴であるとする人間観のいずれも、どう少なく見積もっても2500年以上の永きに亘って議論されてきた“古い”ものばかりであった⁷⁸。しかし同時に、外面に表れた精神の表徴を脳の生理で説明し、「科学」として打ち出した点、つまり生理学的な観相学、科学的観相学であったということに、時代的な新奇性があった。

伝統的な人間観と根強い人間読解術人気を、所謂「実証主義的(positif)」⁷⁹な“新興の科学”が引き受けた。ニュートンの万有引力を始め、B・フランクリン(Benjamin Franklin, 1706 - 1790)の電気理論やモンゴルフィエ兄弟(兄 Joseph Montgolfier, 1740 - 1810 / 弟 Jacques, 1745 - 1799)の熱気球実験など、自然に潜在していた「目に見えない力」を「科学」が次々に曝いていた近代西洋世界⁸⁰の生き生きとした勢いは、ここに胚胎した骨相学を育む“胞衣”であった。一方、未開人・野蛮人が〈発見〉され、急速な産業化に伴う急激な都市化によって「子供」や「狂人」が〈発見〉され⁸¹、劣性・犯罪性の指標たる身体的特徴を備えると考えられた労働者階級＝「危険な階級」⁸²や、都市への人口流入による相互的な“未知なる人々”を大量に生み出した近代西洋世界は、骨相学が立ち回る恰好の舞台であった。

繰り返しになるが、まとめておこう。日々の人間観察・触察に加えて、沢山の頭蓋骨、偉人の胸像・石膏像⁸³、地元の、また各地への講演旅行の際には必ず訪問した当地の学校(school)・収容所(asylum)・病院(hospital)・刑務所(prison)に収容されていた人々の、観察に次ぐ観察を繰り返し⁸⁴、当時一部で流行していた「野生児」までもその例証にして鍛え抜いた⁸⁵ガルのネイチャー探求は、解剖学によって一層の補強を施した19世紀の科学であり、同時に18, 19世紀に〈発見〉且つ出現した“未知なる人々”を読み解くための実践知でもあった。以上からも、この時期の西洋に骨相学の波乱が起こったのは、当然のことだったことが分かるだろう。それ

につけても、骨相学の教育論がガルや骨相学が“前提とした人間”、及び“作り出した人間”と呼応する形でこの時代を伝播してゆく。これ以上の展開は、今後に譲ろう。

7. おわりに

賛否の激論を巻き起こしながら、ガルの学説と後継者による骨相学は、とにもかくにも19世紀西洋を席卷していく。「自然学者」だったガルが、大量観察という方法を通じ、自然の導きによって〈発見〉したと言う「人間」は、性向や能力が全て生得的な27個(30数個)の気質またはその組み合わせ(発達割合)によって決まった、そしてそれが一つ一つの器官の機能で説明される生理学的存在であった。人間は、「魂の作業場(general laboratory of the soul)」⁸⁶たる30数個の器官の集合体である脳、その表徴たる頭蓋の形状を観察することによって、天骨が読み解かれる。頭部への観察・触察・測定が、個々の人間を理解する科学的方略となったのである。

本稿では、“骨相学と教育”という主題を論じるに先立って押さえるべき骨相学の基本的事項として、ガルの脳科学と人間観について、「骨相学」・“Phrenology”という名称に注目しつつ整理し、検討した。ガルの最初期の論稿並びに講演録を繙くことで、骨相学の原理たる彼のアイデアおよび上のような彼の人間観が明らかになった。だが、疑問の向きもあるかも知れない。人間の性向や能力が、消化器や筋肉と同じような「器官」(この場合は、脳)の働きであるとしても、それらが先天的なものであるのならば、教育とは相容れないのではないかと⁸⁷。

確かにガルは、「新たな気質や才能を植え付けたり生み出したるするのは、間違いなく不可能である」と述べており、一聞したところ教育の効果を全面的に否定しているように感じられる(即ち、決定論)。しかし、器官の発達ないし発達のし易さに生理学的な個人差があったとしても、「教育……によって気質を或る程度伸ばすことはできる」のであって、それは決して単に教育を否定するものではない⁸⁸。現にガルは、「人間は無限の教育可能性(Erziehungsfähigkeit)を有し」ていて、「己の性向に立ち向かう」ことができる、とも述べる⁸⁹。人間は教育で以て書き込み自由な「白紙(tabula rāsa)」ではなかったが、人間の自然(本性)を知ることによって、「医療、道徳⁹⁰、教育、法制」に大いに益すると言うのである。

とは言え、科学的な脳研究の側面を押し出したガルは、その応用性を主張しながらも、人間の精神、徳性、才能は「教育の産物」であると論じた18世紀フランスの哲学者エルヴェシウス(Claude Adrien Helvétius, 1715 - 1771)⁹¹ですら認めざるを得なかったと言う、「教育でニュートンを詩人に変えることは不可能だったろう」(能力・才能には個人差があり、先天的である)という言を引くなど、消極的な言葉で教育を語ったことも確かである。ところが一方で、これに対し「脳の生理学」を“心・精神の学(フレノロジー)”と呼んだガルの後継者たちは、実践的な人間読解術の側面を強調し、教育を最も真価の発揮できる分野と位置づけた。同じ人間観を採りながら、教育可能性を積極的に主張してゆく。大衆化・通俗化の道を辿る骨相学にとって、最大の看板が「教育」だったのだ。

骨相学の有した新しさと古さの構造は、そのまま今の時代にも当てはめることができるだろう。では、心や本性(ネイチャー)が(現代の／近い将来の脳科学や心理学によって)可視化され、測定可能

となり、科学的な根拠を以て呈示されるとなれば、教育の大勢は果たしてどのようなものになるだろうか。今日、骨相学は科学によって否定されている。だが、骨相学はなぜ消えたのか。“科学的に正しい”ものであったならば、どうだったのだろうか。析出された骨相学の人間観とそれに応える教育観・教育論は、今日の教育にとって重要な主題を提起しているのである。

今後の課題は、本稿で明らかにしたガルの人間観≡骨相学の人間観を一つの基点として、骨相学の歴史的教育史的検証を進めることである。骨相学が具体的にどのような教育を主張し、人々はそのような態度でそれに臨んだのか。これらの両側面から歴史の実相に迫ることは、脳科学や心理学との結びつきをますます“責務”“当為”としつつある、我々自身の〈教育〉を省察する過程に大いに資すると確信している。

註

- ¹ 理化学研究所脳科学総合研究センター HP < http://www.brain.riken.jp/index_j.html > [2010年3月25日アクセス可能]
- ² 「脳に関する研究開発についての長期的な考え方」『脳の世紀 ニュース』（『脳の世紀』連絡会事務局編）1997年8月10日、vol.3, No.9, 10合併号、クバプロ、7頁
- ³ Nahum Capen, “Biography of Dr. Gall,” François Joseph Gall, *On the origin of the moral qualities and intellectual faculties of man*, Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1835, p.51
- ⁴ C・C・ヒルゲターク、H・バーバス「脳のしわが明かす謎」（小畑史哉訳）『脳科学のフロンティア 意識の謎、知能の謎』（『別冊日経サイエンス』）no.166, 2009年8月、63頁：
「『脳』研究の今」を特集した『Newton』2010年3月号にある入来篤史氏の研究紹介の記事文面も、骨相学を想起させずにはおかない。即ち、「学習によって脳も膨張する」、或いは道具の使用を学習したサル脳の「特定の部位で、脳の体積の膨張を示すと考えられる信号が検出された」などである（36-37頁）。骨相学の理論については、本文以下に記述。
- ⁵ 例えば、Stephen Tomlinson, *Head Masters: Phrenology, Secular Education, and Nineteenth-Century Social Thought*, Alabama: The University of Alabama Press, 2005
Alan Price, “A pioneer of scientific education: George Combe (1788-1858),” *Educational Review*, vol.12, no.3(1960), pp.219-229, 等。
- ⁶ John D. Davies, *Phrenology, Fad and Science: A 19th-Century American Crusade*, Archon Books, 1971, pp.79-88
- ⁷ 例えば、事典の刊行が「出版界の重点事業」であった近代ドイツにおいて、当時「ほとんど唯一の教育関係事典」（山内芳文「ある教育事典編集者のこと」『つくばね』筑波大学図書館報第30巻、第1号、2004年）であったK・A・シュミット（Karl Adolf Schmid, 1804 - 1887）の『教育・授業制度大事典（*Encyclopädie des gesammten Erziehungs- und Unterrichtswesens*）』（1859-1878）第6巻（1867, S.54-58）には「骨相学（Phrenologie）」の項がある。「或る特定の精

神能力の器官として脳を区分する学説が、見せかけの科学（Scheinwissenschaft）に数えられねばならないとしても、それでも尚骨相学は、ただ否定的な言及ばかりではなく教育制度事典に取り上げられる価値がある」という態度は、後の教育事典に共通する。「わが国の教育にとって…少くとも無視さるべきでない」項目の選定から編まれた、戦後刊行の小林澄兄『教育百科辞典』（慶應出版社、1950年、368頁）にさえ「骨相学」の項目が設けられており、同様の執筆態度の下に記述されている。

- ⁸ Erna Lesky, *Franz Joseph Gall: 1758-1828, Naturforscher und Anthropologe*, Bern: H. Huber, 1979
- ⁹ Owsei Temkin, “Gall and the phrenological movement,” *Bulletin of the History of Medicine*, vol.21, no.3(1947), pp.275-321
- ¹⁰ Erwin H. Ackerknecht and Henri V. Vallois, *Franz Joseph Gall, inventor of phrenology and his collection* (Wisconsin studies in medical history no.1, trans. C. St Léon), Madison: Univ. of Wisconsin Medical School, 1956
- ¹¹ 更に彼らに先行する研究例として、P. J. Möbius, *Franz Joseph Gall* (Leipzig, 1905) や M. Neuburger, “Briefe Galls an Andreas und Nannette Streicher,” *Archiv für Geschichte der Medizin*, (1917, pp.3-70) などが挙げられる。
- ¹² John Van Wyhe, “The authority of human nature: the *Schädellehre* of Franz Joseph Gall,” *The British Journal for the History of Science*, vol.35, no. 124(2002), pp.17-42
- ¹³ *ibid.*, p.25
- ¹⁴ 森鷗外「ガルの学説」（1900-1901）『鷗外全集』著作編第25巻（醫事評論一）、岩波書店、1953年、310-329頁
- ¹⁵ 樺山紘一『歴史のなかのからだ』岩波現代文庫、2008年（筑摩書房、1987年）
- ¹⁶ 加藤恒男「F・J・ガルの全体像と骨相学—ヘーゲルの批判との関連の視点から」『中京女子大学紀要』第25号、1991年、201-213頁
- ¹⁷ 浜中淑彦「神経心理学史の里程標」第2回～第5回、『Brain and nerve—脳と神経』第34巻4号～7号、医学書院、1982年
- ¹⁸ 例えば、河野哲也「フランス心理学の誕生」『エピステモロジーの現在』（金森修編著）慶應義塾大学出版会、2008年、237-288頁など。
- ¹⁹ 以下、ガルの来歴については、Leskyの前掲書（注8）pp.9-17を参照した。
- ²⁰ J・P・フランクは「公衆衛生の父」と称されるドイツ出身の医学者・臨床医。ガルがウィーンで活動を始めた頃は、ウィーン総合病院（Allgemeine Krankenhaus）の院長も務めていた。「公衆衛生」とは、彼の言葉で言えば「医療ポリツァイ（medizinische Polizei）」であり、衛生は勿論、貧困・治安・人口（出産）から教育までも対象とした、全社会的規模で規律を貫徹させる行政的統治の思想に他ならなかった。ガルの言説からもその浸透ぶりを窺うことができる（※実際に、Gall, *On the origin of the moral qualities and intellectual faculties of man*, p.69に

は「医療ポリス (medical police)」の語が見える)。(生-権力 (bio-pouvoir)〉(フーコー)の展開としての近代ポリス論を、教育史の視点から検討した研究に白水浩信『ポリスとしての教育—教育的統治のアルケオロジー』(東京大学出版会, 2004 年)があるので、参照されたい。

²¹ 現在もウィーン大学の敷地内に建っており、解剖学や病理学に纏わる事物を紹介する博物館として利用されているらしい。

²² ガルとシュプルツハイムが講演を行った 35 の町の名前や期間の詳細が, Nahum Capen, “A Biography of the Author,” (Johann Gaspar Spurzheim, *Phrenology, in connection with the study of physiognomy*, Marsh, Capen & Lyon, 1834, p.23)に掲載されている。またヴァン・ワイがこの旅程を地図に描いており、ガルが3年あまりのうちに、北はコペンハーゲンから南はベルンにまで赴いたことが一目で分かる (Van Wyhe, op. cit., p.28)。ナポレオン戦争がなければロシアやイタリアまで計画に含まれていたそうだが、これだけ広範囲を行脚し、自説の普及に努めたガルの精力には驚くばかりである。

²³ ゲーテ『年代記—私の他の告白の補追としての日誌』(奥津彦重訳)、ゲーテ全集第三十二巻、改造社、1936 年、223 頁

²⁴ (Gall, 1805) Charles Augustus Blöde, “Dr. F. J. Gall's system of the function of the brain,” 1807, *The emergence of neuroscience in the nineteenth century*, Ed. Nicholas J. Wade, London: Routledge, 2000

²⁵ G. Spurzheim, *Outlines Of Phrenology*, Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1832, p.13

²⁶ van Wyhe, op. cit., p.23 :

骨相学から派生したアメリカの人相学には、ヒトの顔面を 150 もの区分に分けた機能局在論を展開したものまでである (エドウィン・クラーク、ケネス・デュハースト『図説 脳の歴史 絵で見る大脳局在論の話』(松下正明訳) 木村書店、1984 年、96 頁)。

²⁷ J. G. Spurzheim, *The Physiognomical System of Drs. Gall and Spurzheim*, London: Baldwin, Cradock and Joy, 1815

²⁸ (Gall), C. A. Blöde, op. cit., p.20

²⁹ Gall, *On the origin of the moral qualities and intellectual faculties of man*, p.58

³⁰ 講演の最初 14 頁では、主に脳幹部 (延髄 (medulla oblongata) や 橋 (pons Varolii)) や 脊 髄 (medulla spinalis), 小 脳 (cerebellum) 周辺を中心に、各部の形成や神経の走行について解説されている。神経繊維束の集合が脳を形成すると考え、また灰白質 (grey mass) と白質とを区別して注目し—これは、ガルの解剖学上の業績であるが (E. Lesky, “Structure and function in Gall,” p.298) —神経細胞が集合する神経節 (ganglion: 現代の用語では、脳や脊髄など中枢神経系に形成されるものは「神経核 (nucleus)」と呼んで区別しているが、ガルの時代は中枢・末梢の別なく「神経節」と呼んだ) に着目して論じたのは、コブという形状の特徴と人間の気質・能力の相関を見出したガルならではの観察眼によるのだろう。尚、ガルの言う “retrograde nerves” を確定することができなかったが、どうやら森鷗外 (前掲論文、315 頁) はこれを「却走繊

維」と翻訳しているようである。(術語は主に、河合良訓監修／原島広至文・イラスト『脳単』NTS、2005 年、及び『ステッドマン医学大事典』第 3 版、メジカルビュー社、1992 年、を参照した。)

³¹ Erna Lesky, “Structure and function in Gall,” *Bulletin of the History of Medicine*, vol.44, no.4(1970), pp.297-314, を参照。

³² 解剖学と生理学は、自身熱心な骨相学信奉者であった A・コントが、「知的・道徳的、即ち脳の機能 (Intellectual and moral, or cerebral functions)」と題したその『実証哲学講義』(1830-1842) の第 4 章で、「生物の真の科学 (the science of living beings)」の要件として論じた分析視角であった (Auguste Comte, *The Positive Philosophy*, trans. Harriet Martineau, vol.2, London: George Bell & Sons, 1896, p.123)

³³ ガルは、講義に沢山の頭蓋骨や鋳物の頭部、サルなどを持ち込んでいたようだが、このドレスデン講演では、「自殺者 (suicide)」の献体を用いて解剖実演を行っている ((Gall), C. A. Blöde, op. cit., p.11)

³⁴ リチャード・セネット「身振りのアート」、ジュディス・ウェクスラー『人間喜劇』(高山宏訳) ありな書房、1987 年、7-15 頁

³⁵ John Van Wyhe, op. cit., p.22

³⁶ Erwin H. Ackerknecht, “Gall,” *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 6, Berlin: Duncker & Humblot, 1964, p.42

³⁷ フォースターは、同年ハーシェルやバベッジ、ヒューウェルらに科学を講じたと考えられている知識人で、天文学や医学、そして骨相学などを研究した。1806 年ごろからガルの学説に興味を抱いていた彼が熱心な骨相学徒となったのは、前年の 1814 年にシュプルツハイムと出会い、骨相診断をしてもらって以来である。(Roger Cooter, *The cultural meaning of popular science: Phrenology and the organization of consent in nineteenth-century*, New York: Cambridge University Press, 1984, p.59ff.)

³⁸ Thomas Forster, “Observations on a new System of Phrenology, or the Anatomy and Physiology of the Brain of Drs. Gall and Spurzheim,” *The Philosophical Magazine and Journal*, 45 (January, 1815), pp.44-50

及び, “Sketch of the new anatomy and physiology of the brain and nervous system of Drs. Gall and Spurzheim, considered as comprehending a complete system of Phrenology,” *The Pamphleteer*, 5(1815), pp.219-244, の 2 本を参照した。

³⁹ 今では「統合失調症」と呼ばれ、一頃流行した「スキゾ」という言葉の元にもなった「スキゾフレンニア (Schizophrenie, 精神分裂病)」の「フレンニア」も同語源であり、「精神」と訳出されてきた。尚、精神の座としての「フレーン」については、古代ローマの大プリニウスが『博物誌』の中で「陽気を生み出す中心」として説明しているし (『プリニウスの博物誌 1』(中野定雄ほか訳) 第 11 巻 77, 雄山閣出版, 515 頁), 古代ギリシャのヒポクラテスも論じている。興味深いことには、ヒポクラテスは横隔膜より寧ろ「脳によって思考したり理解したり見聞きしたりし、醜いものや美しいもの、わるいものやよいもの、さ

らに快不快を知る」と述べ、「われわれの快樂も喜び笑いも戯れも、また苦しみも不安も泣くことも、脳以外のどこからも生じてこない」と断言しており、「横隔膜（φρῆν）はたまたま慣用的に知覚するものという名称で呼ばれているに過ぎず、事実上も、本性上もそのようなものではない」と言い切っている（ヒポクラテス「神聖病について」（石渡隆司訳）『新訂ヒポクラテス全集』第二巻、エンタプライズ、1997年、111-132頁）。

⁴⁰ 富士川游「医者風の俗・迷信」『富士川游著作集 第3巻』思文閣、1980年、352頁

⁴¹ 佐藤達哉『日本における心理学の受容と展開』北大路書房、2002年、26頁

⁴² 西周「百学連環」『西周全集』（大久保利兼編）第四巻、宗高書房、1981年、151頁

⁴³ 伊地知英太郎・新宮凉園纂輯『袖珍医学辞彙』伊藤誠之堂、1886年、273頁

⁴⁴ 堀養父彦『西洋人相学解剖説明全書』1890年：

「人相」や「観相」の語が冠されたこの頃の文献に、その実、骨相学を主題とするものが（堀の著作のほか、例えば、井上勝五郎『観相奇術』1890年、など）、また逆に「骨相学」とあってもフレノロジーでない例が、ままた見られるため、注意が必要である。

⁴⁵ 石龍子『性相学精義』性相学会、1911年、また松軒翁（永峰秀樹）訳『性相学原論』三星社、1917年（原典、G. Combe, *A System of Phrenology*）：

「観相家」石龍子については、中山茂春「石龍子と相学提要」『日本医史学雑誌』（第55巻第3号、2009年、371-376頁）を参照。

⁴⁶ 長谷川泰「骨相学」（小林病翁校）『百科全書』第三巻・下巻、丸善、1884年、41-84頁：

順に文部省（1876）、有隣堂（1883）、丸善から刊行されている（因みに、井上哲次郎『哲学字彙』（1881、67頁；『近代日本学術用語集成』龍溪書舎、1988年）では「骨相論」となっている）。原本は *Chambers's Information for the People*, William and Robert Chambers ed., Edinburgh: William and Robert Chambers の第4版（1857）か（詳しくは、松永俊男「チェンバーズ『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」（*Chambers's Information for the People* 第5版復刻版別冊日本語解説）、ユーリカ・プレス、2005年、など参照）。

⁴⁷ 1812年には、シュプルツハイムとともに『医学事典』の「脳（cerveau）」等の項目を執筆している（ex. Gall et Spurzheim, “CERVEAU,” *Dictionnaire des sciences médicales*, vol.4, Une Société de Médecins et de Chirurgiens, Paris: Panckoucke, 1812, pp.447-479）。

⁴⁸ François Joseph Gall, “Letter from Dr. F. J. Gall, to Joseph Fr. De Retzer, upon the Functions of the Brain, in Man and Animals,” *On The Origin Of The Moral Qualities And Intellectual Faculties of Man*, Boston: Marsh, Capen & Lyon, 1835, pp.7-19：

ドイツ語原文 “Des Herrn Dr. F. J. Gall Schreiben über seinen bereits geendigten Prodromus über die Verrichtungen des Gehirns der Menschen und Thiere an Herrn Jos.

Fr. von Retzer” が、ヴァン・ワイのHP < <http://www.historyofphrenology.org.uk/> > から閲読できる〔2010年3月25日アクセス可能〕。また、1835年の『パリ骨相学協会誌（*Journal de la Société phrénologique de Paris*）』にはフランス語訳が掲載されている。

⁴⁹ *Some Account of Dr. Gall's New Theory of Physiognomy*, London: Longman, Hurst, Rees and Orme, 1807

⁵⁰ John S. Hart, *In the school-room: chapters in the philosophy of education*, Philadelphia: Eldredge & Brother, 1868（邦訳、『学室要論』ファン・カステル訳；小林病翁校、文部省、1976年）

⁵¹ Paul H. Douglas, *American Apprenticeship And Industrial Education*, New York: Columbia University, 1921（邦訳、『職業指導論』中央職業紹介事務局編、1926年）

⁵² Patricia S. Noel & Eric T. Carlson, “Origins of the Word “Phrenology,” *The American Journal of Psychiatry*, vol.127, no.5(1970), p.155

⁵³ 大槻文彦編『大言海』富山房、1932年、307頁

⁵⁴ 藤原博之「論運命」『本朝文粹 註釈上冊』（藤原明衡編・柿村重松註釈）内外出版、1922年、405頁

⁵⁵ 『下学集』（亀井孝校訂）岩波文庫、1944年、62頁

⁵⁶ 事実、nature の翻訳語の一つは「天」である（柳父章「自然」『翻訳語成立事情』岩波新書、1982年、125-148頁を参照）

⁵⁷ 例えば、George Boas, “Nature,” *Dictionary of the history of ideas : studies of selected pivotal ideas*, ed. Philip P. Wiener, vol. III, New York: Charles Scribner's Sons, 1973, pp.346-350（邦訳、「自然」（垂水雄二訳）『西洋思想大事典』2巻、平凡社、1997年、266-271頁）を参照。

⁵⁸ Lord Bacon, *Novum Organum*, ed. Joseph Devey, New York: P. F. Collier and Son, 1901, p.71（邦訳、『ノヴム・オルガヌム』（服部英次郎訳、『ベーコン』世界大思想全集哲学文芸思想編5）河出書房新社、1963年、286頁）

⁵⁹ 村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社、1976年、23頁

⁶⁰ 例えば、中山茂『歴史としての学問』中公叢書、1974年、114-124頁を参照。また、文学などへの影響については、高山宏『近代文化史入門—超英文学講義』講談社学術文庫、2007年、13-31頁を参照。

⁶¹ メスマー「動物磁気発見のいきさつ」『キリスト教神秘主義著作集16』（中井章子・本間邦雄・岡部雄三訳）教文館、1993年

⁶² ドゥルーズは、ヒューム（『人性論』四、大槻春彦訳、岩波文庫、1952年、67-68頁）が人間のネイチャーを、「運動を分解する物理学者の流儀に従って」考察することに言及した点を指摘している（『経験性と主体性』木田元・財津理訳、河出書房新社、2000年、7頁）。

⁶³ Johann Gaspar Spurzheim, *Phrenology, in connection with the study of physiognomy*, Boston : Marsh, Capen & Lyon, 1834, p.177

⁶⁴ 鈴木七美によれば、ラーファーターは人間の横顔のシルエットに注目することで、人相学の対象を「抽象化」された「頭部へと縮減」し、「計測・測定への執着という新しい態度」を生むことで、19世紀の骨相学へと橋渡ししたのである。（鈴木七美

『癒しの歴史人類学』世界思想社、2002年、112頁)

⁶⁵ ヴァン・ワイの整理したガルの文献目録「F・J・ガル全作品 (Complete works of Franz Joseph Gall)」には、ドイツ語で出版された同名の文献はない<前掲 URL>。1810 - 19年にフランス語で出版された4巻本『神経系一般および特殊な脳の解剖学と生理学 (Anatomie et physiologie du système nerveux en général et du cerveau en particulier)』、並びに同じく1822 - 25年にかけて出版された6巻本『脳とその各部分の機能について…、或いは人間と動物の道徳および知性の気質 (Sur les fonctions du cerveau et sur celles de chacune de ses parties)』が本体にあたると考えれば、この「緒論 (Prodromus)」が実はガル学説の“総論”であったことが分かる。

⁶⁶ Gall, “Letter from Dr. F. J. Gall, to Joseph Fr. De Retzer,” p.8
⁶⁷ ibid., p.17

⁶⁸ Gall, *On the origin of the moral qualities and intellectual faculties of man*, p.64

⁶⁹ Spurzheim, op. cit., p.178

⁷⁰ George Combe, *The Constitution of Man considered in Relation to External Objects*, 7th ed., Edinburgh: Maclachlan and Stewart, 1836, p.329

⁷¹ ジュディス・ウェクスラー、前掲書

⁷² 先行研究によれば、ガルは理神論者 (deist) と呼ばれていたというが (Temkin, op.cit., p.300ff), 「宗教と科学」の問題は、骨相学にとって避けられない問題であった。ガルにしても、「神と信仰 (Dieu et religion)」の器官について解説しているし (例えば、上記注 65 の *Anatomie et physiologie* の第4巻 (1819), pp.243-271), G・クームも『人間構成論』(注 70) で一章を割いて論じている (Combe, op. cit., Chapter 9)。

⁷³ Gall, op. cit., p.149

⁷⁴ R・G・コリングウッド『自然の観念』(平林康之・大沼忠弘訳) みすず書房、1974年、24頁

⁷⁵ 浜中淑彦「Gallの脳器官学 organologie とその形成」, 前掲書 (第34巻5号), 517頁

⁷⁶ 樺山紘一、前掲書、155頁

⁷⁷ Roger Cooter, op. cit., p.40 :

この点において、ポパー (K. Popper) のような反証主義者に言わせれば、その限りでガルの理論は反証可能性 (Falsifiability) のない擬似科学ということになるのかも知れない (尚、「反証主義」については、A・F・チャルマーズ『新版 科学論の展開』(高田紀代志・佐野正博訳) 恒星社厚生閣、1985年を参照)。

⁷⁸ レスキーは、本稿でも触れた「宿命論と自由意志」などについて論じている。また、詳細には立ち入らなかったが本文中でも触れた、脳の孕む「動物性 (Animalität)」と「人間性 (Humanität)」に注目し、ガルが呈示したという、これら2つの程度の違いによって区別される「6つの人間タイプ」を解説しており、非常に興味深い。(Lesky, *Franz Joseph Gall*, S.173-176)

⁷⁹ 古さと新しさの問題に関連して、飲酒のような社会の慣習さえ“自然の導き”の結果からガルが説明をしえた矛盾をナポレオンが弁難したように (ピエール・チュイリエ『反=科学史』(小

出昭一郎監訳) 新評論、1984年、89頁), この視点から30個前後の能力や性向に関しても吟味してみれば面白いかも知れない

⁸⁰ 本田喜代治・出隆・大橋精夫「用語解説」『実証の思想』世界の思想第10巻、河出書房、1966年、390頁

⁸¹ ロバート・ダーントン『パリのメスマー』(稲生永訳) 平凡社、1987年、43頁

⁸² 中村雄二郎の指摘する、近代に〈発見〉された3つの人間 (『術語集一気になることば』岩波新書、1984年、76頁)。それぞれ、P・アリエス『子供の誕生』(1960), M・フーコー『狂気の歴史』(1961), C・レヴィ=ストロース『野生の思考』(1962) による。

⁸³ ルイ・シュヴァリエ『労働階級と危険な階級—19世紀前半のパリ』(喜安朗・木下賢一・相良匡俊訳) みすず書房、1993年、を参照。

⁸⁴ ミシェル・ロヴリック『世界の奇妙な博物館』(安原和見訳) ちくま学芸文庫、2009年、

及び、久保田裕「怪シゲ医療器具博物館」(『科学朝日』1994年10月号), を参照。ガルのコレクションに関しては、パリの人類博物館やウィーンのエロレット博物館 (Rollett Museum) に保存・展示されている。

⁸⁵ Gall, op. cit., p.66

⁸⁶ ibid., p.165 :

ガルは「アヴェロンの未開人 (The savage of Aveyron)」を訪問し、「虚弱な気質 (weak-minded) の持ち主」と診断している。

⁸⁷ (Gall), C. A. Blöde, op. cit., p.2

⁸⁸ テムキン (1947) やレスキー (1979) もこの問題を取り上げており、テムキンは「実に、教育の問題は、ガルが最初期に直面した決定的な問題であった」としている (O. Temkin, op. cit., p.287)。

⁸⁹ (Gall), C. A. Blöde, op. cit., pp.17-18

⁹⁰ Gall, “Letter from Dr. F. J. Gall, to Joseph Fr. De Retzer,” p.9

⁹¹ morality の訳。I・ハッキングによると, moral は「道徳」「精神」の他に「慣習・風俗」まで広い意味を有する語であり (『偶然を飼いならす』(石原英樹・重田園江訳) 木鐸社、1999年、55頁), ここも当時の文脈から「犯罪・刑罰」まで含意する用法と推察される。

⁹² C・A・エルヴェシウスは、『精神論』(1758) や『人間論』(1772) などの著作のあるフランスの哲学者。『人間論』は、その副題「その知的能力および教育 (éducation) について」からも分かる通り、教育論が主題である。ルソーの『エミール』(1762) が火付け役となり、当時教育を語ることは一種のブームとなっていたようである (エルベシウス『人間論』上巻 (根岸國孝訳) 日本評論社、1949年)。

補遺) 本論文は、平成20年～23年度日本学術振興会科学研究費補助金「西洋思想における「身体」と「心」の教育概念史」(研究代表者: 白水浩信) (基盤研究 (C)) の研究成果の一部である。